

午前零時の

靖國神社初詣

佐藤 正 陸自78

元日の午前零時を靖國神社の拝殿前で迎えた。

大晦日の23時30分、大鳥居で一礼して本殿に向かうと、参道の両側には篝火が赤々と灯されていた。それぞれの篝火の周りには、半袖の制服を着たボーイスカウトの少年たちが、「整列休め」の姿勢で警護している。

大手水舎で身を清めた後に神門をくぐると、すでに多くの参拝客が横20人、長さ50メートルほどの行列を作っていた。参拝客のほとんどが平成生まれの若者で、数人のグループやカップルで来ている。男性6割、女性4割ぐらいの比率だろうか。

若者たちは、時々スマートフォンをのぞき込んでいる。列の中でしばらく待っていると、「あと1分」という掛け声が数カ所から聞こえた。その後、自然発生的に「10:33・2・1」と新年のカウトダウンが始まり、一斉に「おめでと〜ございませす」という歓声が沸き上がった。同時に、靖國の太鼓が21回連続して鳴り響き、明るく灯された篝火とあいまって、境内は荘厳

な雰囲気にも包まれた。

後ろを振り返ると、参拝客の列はさらに長く伸び、神門の向こうまで続いていた。

20分ほどで、ようやく参拝の順番がきた。平成29年が、御祭神のご加護のもと、平和で安全な1年となることを祈った。

参集殿の近くでは、毎年、全国の酒造業者から奉納された酒のラベルが展示されている。元日から4日まで、これらの御神酒が参拝客に振舞われており、謹んで頂戴した。

0時30分に拝殿を後にしたが、参道では、参拝客の人波が途切れることなく本殿に向かって続いていた。この時刻になると、若者よりも年配者の参拝客を多く見かけた。

昨年は、慰霊に関して二つの歴史的な出来事があった。一つは、5月のオバマ大統領による広島原爆死没者慰霊碑への献花であり、もう一つは12月の安倍首相による真珠湾のアリゾナ記念館での慰霊である。双方とも日米両国民の圧倒的多数から強い感動をもって受け止められた。首脳同士による慰霊という崇高な行為が、両国民の信頼関係を一層高めたことを内外に示した。

近い将来、靖國神社においても日米両首脳がともに参拝される日が来ることを心から祈りたい。